

ヒポクラテスの「自然治癒力」をめぐって

細 見 博 志

要 旨

人には病気になっても自ずとよくなる力が備わっている、という考え方が昔からあり、「自然治癒力」と呼ばれ、西洋医学ではヒポクラテスの名前と結びついて伝わってきた。しかし現代の医学は、ワイルによれば、熱が出れば解熱剤、血圧が上がれば降圧剤、と薬物を処方し、生体に本来備わる免疫系を生かすことを忘れていた。その意味であらためて「自然治癒力」を理解することが重要となっている。その「自然治癒力」を『ヒポクラテス全集』に探れば、意外なことに「自然治癒力」という概念は存在せず、「自然」があるだけである。ヒポクラテスの考え方を明らかにするには、表現を手がかりにするだけでは不十分で、その著作の意味内容を探らねばならない。ここではヒポクラテス研究からすれば副次的資料であるが、ジョーンズの解説、川喜田愛郎、ノイブルガーの医学史研究、を手がかりに「自然治癒力」の理解に迫る。

KEY WORDS

vis medicatrix naturae, physis, Hippocrates, specific etiology

はじめに

1. ワイルの現代医療批判
2. ヒポクラテスの自然治癒力
 2. 1. ジョーンズの解説から
 2. 2. 川喜多愛郎の『近代医学の史的基盤』から
 2. 3. ノイブルガーの『自然治癒力史』から

結びに代えて

註

はじめに

風邪を引いて熱が出る。子どもは摂氏39度になっても割と平気、ということがよくあるのに、大人は平熱より2度も高いと、文字どおり「夢は枯れ野を駆けめぐり、死ぬか生きるかの大騒ぎ。こんな時に近所のお医者さんに診てもらおうと、安静を勧められ、解熱剤を処方されて、高熱で苦しがるようなら用いなさい、といわれ、時には、「熱も体が良くなろうとして出るのだから、薬で無理に抑えつけないで、自然に任せて、様子を見なさい」と付け加えられる。

こういった日常的な診察風景の中にも、病気を治すのは生体そのものの働きであり、医者や薬はその手伝いに過ぎない、体には病気を治す力が本来備わっ

ている、発熱はその力と外部から進入したばい菌との戦いの現れである、だから発熱自体は一概に悪いことではなく、むしろ熱を無理に下げるのは生体の抵抗に水を差すことになりかねない、といった昔からの考え方が潜んでいる。生体に備わっていると考えられているこのような力を、「自然治癒力」と呼び、ギリシャの医聖ヒポクラテスの名前と結びつけられて現在にまで至っている。

この小論では、まず、現代において自然治癒力の重要性を説いているアンドルー・ワイルの例を提示し、次に、彼の場合のみならず、一般にその考え方の源とされているヒポクラテスに遡る。ヒポクラテスについては、医学史の基本的な文献で、その自然治癒力の概念がいかに理解されているかを紹介し、それをこの小論の中心的な課題としたい。ヒポクラテスの文献そのものにおいて、自然治癒力の概念がどのように基礎づけられているかを明らかにすることは、今後の課題としたい。というのも、ヒポクラテスの文献において、「自然治癒力」は、断片的には言及されてはいても（たとえば、「病気を癒すものは自然である」、あるいは同じ表現を訳し変えて「自然は病気の医者である」）、テーマとして取り上げられているところがほとんどないように思われ、

ヒポクラテスの自然治癒力概念を明らかにするためには、彼の代表的な著作の、内容全体の検討が欠かせないし、それは現在の筆者には手に余る課題である、と考えるからである。

1. ワイルにおける「自然治癒力」

アンドルー・ワイル (1942-) はさまざまな啓蒙的著作において、熱が上がれば解熱剤、血圧が上がれば降圧剤、といった現代医学の対症療法的、抑圧的性格に警鐘を促している。そして、体と心を包括する、健康と癒しの観念を提示している。さらに、「代替医学」の中で一見迷信的なものも含めて、さまざまな治療法の使い分けを勧め、それだけの力量のある「賢い」患者になることを要求する（「誰もが自分の主治医である」は、19世紀中頃のアメリカの popular health movement のスローガンであったが、ワイル自身の立場をも表現していると理解して良いだろう）。もっとも彼の多くの著作が、健康と病気に関する実践的なアドヴァイスで占められている中で、ここでは比較的理論的な二つの著作を参照する。

邦題『人はなぜ治るのか——現代医学と代替医学にみる治癒と健康のメカニズム』（上野圭一訳、日本教文社、改訂初版1993年、9版1997年、原題：A. Weil, Health and Healing. Understanding Conventional and Alternative Medicine, 1983, revised and updated, 1988）において、第I章の「治療と治癒」で、簡単にアメリカ近代の医療の歴史を辿っている。それによれば1780年代から1850年代までの70年間、徒に積極的な治療法をとる「英雄医学」heroic medicine の時代を迎え、瀉血が全盛となる（1799年になくなった初代大統領ジョージ・ワシントンもいわばその犠牲者となった）。その反省から19世紀半ばから、ドイツのハーネマンの「ホメオパシー」[患者の症状と同じ症状を引き起こす薬を微量に用いる治療法で、「同種療法」を意味する]などの「代替療法」が盛んとなる（ハーネマンは正統的医学を「アロパシー」（異種療法）と呼んだ）。20世紀に入り、病原菌の発見や抗生物質の発明にみられる科学的医学の全盛期を迎える。しかし「今世紀の最後の四半世紀は、アロパシー医学を支えていたテクノロジー信仰が色あせてきた時代である。社会のあらゆる領域で、正統的医学に対する不満が年毎に大きくなっている。声を大にして、その三大欠陥が繰り返し叫ばれている、高価につきすぎる、危険が大きすぎる、心臓病・がん・脳出血など

の十大疾患の治療がはかばかしくない。現代の病院中心の医学は、テクノロジーに依存しすぎる危険の多い治療法を信頼し、体に備わった治癒力を無視、あるいは否定しているかに見えるその態度によって、ますます『英雄』医学に似てきている。」（同34頁）

それでは「体に備わった治癒力」とはなにか。第II章の「健康とはなにか」でワイルは、health（健康）とhealing（癒し）がともにwhole（全体）と関係し、balance（天秤）<bi-(二つ)+lanx（平皿）, equilibrium（平衡）<aequus（等しい）+libra（秤）に遡ることを、語源的に示す。その上で「健康とは、単に病気ではないということでは全くない。それは、人間を構成し人間をとりまくあらゆる要素、あらゆる力が、ダイナミックに、かつ調和的に平衡状態にあることなのだ」と定義する（70頁）。その上で、「健康と病気の十大原理」を示し、「完璧な健康は達成できない」、「病気になっても大丈夫」、の次の三番目に「体には自然治癒力がある」をあげ、次のように説明している。「治癒は外からではなく、内からやってくる。それは、失われた平衡を取り戻そうとする、体に本来備わった働きである。治癒が起こるのを防ぐこともできなければ…、外部の誰か…から治癒そのものをももらうこともできない。治癒力は生まれながらに備わっている。…あらゆる人が生得的な治癒力を持っているのだ。／…医薬や治療家は、治癒反応に触媒作用を及ぼし、治癒を妨げているものを取り除くことはできるかも知れない。しかし、最初から持っていないものを与えることはできない。治る力はその人に固有の属性であり、常に変化する諸条件が整えば、いつでも現状に復帰できることを保証する、生得権なのだ。」（76-77頁）

第三章の「治癒とはなにか」でも、「[生体の] 反応・再生・適応はすべて、失われた平衡を取り戻そうとする自動的な営みだ。なにも考えなくとも、手を加えたり何らかの外力を借りたりしなくとも、自然に行われる。治療は、心身が損なわれれば、いつでもおこるべくしておこる。いや、加えられた重さによって天秤が新しい平衡点を求めて動くように、治療は《どうしても》おこってしまうのだ」（99頁）。そのような典型は、傷が自ずと癒え、傷口が自ずとふさがり場合である。それでは傷や病気が癒えず、果ては死を迎えることがあるのはどうしてなのか。「（糖尿病のように）血行が悪くて治癒エネルギーが発揮できない；栄養不足、特にタンパク質欠乏時のように、損傷部を補修するための材料が足りない；

感染のように、傷を悪化させる害作用の力で治癒が阻害される」といった場合があるからだ(101頁)。そして自らの足の指の傷が、小石が残っていたためにいつまでも癒えなかったという、治癒力がブロックされた体験を紹介している。逆に言えば、「治癒力がブロックされるという事実から、治療の可能性が生まれる。起こるべくしておこる治癒を早めたり高めたりすることはできないが、治癒の障害物を除去したり、失われた材料を補給したりして病変部分に治癒が発動するのを手助けすることはできる。医学のことを『癒しの業』とよぶのは誤っている。癒しのはじめは、体が持つ秘密の智慧である。医学にできるのは、それがうまく行われるように助けること以外の何物でもない」(105頁)¹⁾。そしてこのような治癒力を、「自然治癒力」 *medicatrix vis naturae* と呼んでいる(121頁, 184頁)。

前著の12年後ワイルは、『癒す心、治る力—自発的治癒とはなにか』(角川書店, 1995, 原題: A. Weil, Spontaneous Healing, 1995)で、「からだには治る力がある、なぜなら、からだには治癒系 healing system が備わっているからである」(同16頁)、という同様のテーマを取り上げる。前掲書との関連で、「治癒系を阻害する8大要因」から紹介すれば、(1)エネルギー不足(栄養失調, 飢餓, 代謝不良, 精神的ストレス), (2)循環不全(たとえばアテローム性動脈硬化の糖尿病患者), (3)浅い呼吸, (4)防衛障害(感染, 特定の物質の害作用, 不健康な精神状態, などによる免疫力の低下), (5)有害物質, (6)老化, (7)心理的作用, (8)精神的・霊的な問題, である(184-193頁)。これらの阻害要因は、同時にまたそのまま、治療の手がかりとなる。

治療 treatment と治癒 healing の関係について、同書は次のように述べている。「仮に細菌性肺炎にかかったとしよう。深刻な、生命の危険がある感染症である。私は病院に行き、抗生物質の点滴を受け、回復し、退院し、治る。では、なおしたのはなにか? たいがいの人は、医師も患者もひとしく、治療のおかげで治ったというだろう。だが…抗生物質がしてくれた仕事は、免疫系が本来の責任を引き継ぎ、仕事をやり終えられるだけの状態にまで、侵襲する細菌の数を減らすことにあった。抗生物質の応援がなければ、恐るべき数の細菌や細菌毒に圧倒されて感染を終わらせることはできなかったかも知れないが、実際に治したのは、実は免疫系なのだ。免疫系は、治癒系の構成要素なのである。／治療がほどこされようと否と、すべての治癒に共通する最終原因は治

癒系にある。…ある治療が効くとき、それは生まれながらに備わっている治癒メカニズムを活性化させることによって効くのだ。治療は—薬剤や手術も含めて—治癒を促進し、治癒の障害物を取り除くが、治療と治癒とは同じものではない。治療は外からほどこされ、治癒は内から起こってくる。だからといって、治療を拒否して治癒を待つのは愚かな態度かも知れない」(164頁)。ここでワイルは、徒に治療を拒否して、ひたすら治癒を待望している患者を、洪水にあって神の助けを待み、ヘリコプターやボートやロープを拒んで、結局水に吞まれた信仰篤い神父にたとえている。天国に召された神父が神に一言恨みを述べたとき、驚いた神は、人為を介してあれほど救いの手をさしのべたではないか、と答えたのであった。

もとよりワイルの場合も、治療は無意味である、という結論には決してならない。治療は治癒を活性化するという意味があるのである。ワイルが批判するのは、治療のみに頼り、内部の抵抗力・免疫力を培うことを忘れてしまうことである。それも抗生物質の多用という治療法が、一層問題なのだ。「病気の外的因子をたたく武器を信頼すべきなのか、それとも、外的因子に抵抗できるだけの力を付ける内的資源を信頼すべきなのか? 抗生物質と細菌によるいたちごっこの経験は、はじめはどんなに効果的に見える武器でも、武器だけに頼りすぎていると、しいには最悪の結果を招きかねないということを教えている。武器それ自体が細菌の進化に影響を与え、毒性を強めさせて、より危険な敵に仕立て上げているのである。ところが、宿主の抵抗性を高めることにエネルギーを注いでいる限り、細菌は現状のまま進化せず、われわれは安全圏に止まっていられることになる。薬や医師に頼るよりは治癒系に頼った方が賢い、と言えそうだ」(166頁)。

こうしてあらためて、伝統的なヒポクラテスの、*Primum non nocere* (まず、傷つけることなかれ)と、*Vis Medicatrix Naturae* (自然治癒力)を崇めよ、という教えが、現代においても意味を持ち続けている、とワイルは考える(56頁)。ワイルにとってこの二つの言葉は(消極的、積極的、と表現の方向は異なるが)、治療を重視するあまりに治癒を忘れ、免疫系や治癒系の活性化に背を向けた現代医学、患者が生体であることを忘れ、いわば機械の修理工になり果てた現代医学に、警鐘を促しているのである。

2. ヒポクラテスの自然治癒力

それではヒポクラテスの文献において、「自然治癒力」がどのように説明されているかをみてみなければならない。まず確認すべきは、ラテン語の *vis medicatrix naturae* (自然治癒力) は、ギリシャ語の「ヒポクラテス全集」では *physis* 一語である、ということである²⁾。*physis* は一般に「自然」であるが、大月真一郎編『新訂ヒポクラテス全集』(全三巻, 1988, 新訂版1997, エンタプライズ株式会社)を散見すれば、しばしば「自然性」、あるいは「本質」、「本性」、時には「体質」(たとえば『流行病』第1巻第1節第2章, Jones 訳では 'constitution') とか「(生まれつきの) 資質」(たとえば『法』, 2, Jones 訳では 'natural ability', 'nature') など、「自然治癒力」という訳語は用いられていない。「自然治癒力」という意味を読み込める場合として、『流行病』第6巻第5章第1節の冒頭の有名な表現がある。煩瑣にもかかわらず全文を紹介しておく。「病気を癒すものは自然 (*physies*) である³⁾。自然 (*physis*) は、癒すてだてを自分でみつけることができる。しかもそれは、熟慮してのことではない。たとえば、まばたきや舌をはじめ、そのようなすべてのものが手助けとなる。自然 (*physis*) は、なにも教わったり学んだりせずに、必要な処置をほどこすことができる。涙、鼻水、くしゃみ、耳垢、唾液、嘔吐、呼気、吸気、あくび、咳、しゃっくりがさまざまな仕方でおこる。排尿、放屁、げっぷ、食べたものの排泄、蒸発、女性においてはそれに特有のもの、体のその他の部位に起こるものとしては、発汗、かゆみ、のび、その他、同様な一切のことがそうである。」この巻の訳者(近藤均)の冒頭の「自然」にあてた註によれば、「…この語は『人為を加えない生来のままの本性』というほどの意味をもつ。本節ではとくに、人体に生来備わっている、病気を治癒し健康を保つ調整機能を指す。その機能は具体的には、『涙』以降に現れるさまざまな現象となって現れる。ヒポクラテスが率いたコス学派は、人体が生来持つこの調整機能に絶大な信頼を寄せ、医師の役割を、ここの患者のピュシスがうまく機能するよう援助することにほぼ限定していた。…」ここで「自然」と訳された語は、少なくともヒポクラテス引用文冒頭に限れば、「自然治癒力」と訳すことが可能である。そして訳者が注記するように、この力は、涙、鼻水、汗、排泄、嘔吐など、人体から不要・有害な物質を排出する機能と結びついて、端的に言えば、ほとんど排出機能とのみ結びついて、発揮さ

れている。ここにすでに、自然治癒力を生かすことが代謝機能、引いては食事療法、と不可分であるというヒポクラテスの立場を予想することができる。

「自然治癒力」が「新訂ヒポクラテス全集」に用語としてストレートに現れないから、迂遠なようであるが、解説や医学史などの、ヒポクラテス研究からすれば副次的な文献を頼りに、この概念の理解を試みることにしよう。

2.1. ジョーンズの解説から

The Loeb Classical Library の Hippocrates, Vol. 1 (1923, 再版1995) の編者 W.H.S. Jones は、その解説 (pp. ix-lxix, esp. pp. ix-xxi) で、通説に従って、ヒポクラテス (あるいはヒポクラテス学派) の意義を、宗教や迷信、さらには哲学、からの科学としての医学の脱却、というところに置いている。もとよりヒポクラテスの中にも、体液説のような、経験科学に基づかないものが存在する。そしてこの(四)体液説(血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁)は、哲学者エンペドクレスの四元素説(火、空気、水、土)に対応している。しかし Jones によれば、ヒポクラテスの体液説は、科学的仮説として、経験的データとかかわり、検証可能だとして肯定されるが、エンペドクレスの四元素説のような哲学的仮説は、経験的データと無関係に独断的な体系を築くための基礎となるに過ぎない、として退けられる。全集の中では、『予後』、『急性病の摂生法について』、『流行病第一巻、第三巻』をとくに重要な著作として取り上げ、それらに認められるヒポクラテス医学の傾向を、次の六点にまとめている (p. xvi)。

- (1) 病気は自然の過程を辿る。結果が好転するか命にかかわるかを知るために、医者はその過程を熟知していなければならない。
- (2) 病気は体の構成要素の失調から生じる。この失調は空気や気候と関係する。
- (3) 自然はこの不調を、内在熱 *innate heat* の働きによって正常な状態に復旧する。この熱は「未熟な」体液を「混和」(調理 *concoct*, *pepsis*) する。
- (4) 一定の期日に分利の (*critical*) 日がある。その時には自然と病気の闘いが分利 (*crisis*, 急性疾患における急激な変化——いわば山場——を意味する。特に、よい方への変化——たとえば急に熱が下がって軽快になるといった——をさすことが多い) を迎える。
- (5) 体内の有害物質が排出されたり膿として出され

たりすれば、自然が勝ったこととなり、有害物質の「混和」ができなければ患者は死ぬ。

- (6) 医者が患者にできることは、自然にチャンスを与えることであり、自然の好意的な働きを邪魔するものをすべて摂生法によって取り除くことである。(なお、ここで「自然治癒力」を用いるならば、(3)、(4)、(5)、(6)の「自然」に適用可能である)

このようなヒポクラテスの傾向に対して、二つの批判が向けられた。一つは、1836年のフランスの医師 M.S. Houdart によるもので、ヒポクラテスの態度は、生死の瀬戸際にある患者に対して、拱手傍観しているに等しい、というものであった (pp. xviiif.)。とくに、『流行病第一巻、第三巻』の、次々と死んでいく患者に対する、冷徹冷静な観察が、冷酷无情的な医師という印象を与えたのであった⁴⁾。そのような批判の典型を、前一世紀のローマの有名な医者 Asclepiades に認めることができる。彼はヒポクラテス医学を、「死の観想」 meditation upon death と呼んだ⁵⁾。しかしこのような批判は、冷徹と冷酷を同一視するもので、ヒポクラテスは冷徹に観察すると同時に、治療も行ったのだと Jones は一蹴する⁶⁾。

以上の批判は、ヒポクラテスが冷酷か否かという、いささか感情的な議論に収束しかねないが、それよりも重要なのは、先のヒポクラテス医学の傾向の(3)と(6)にかかわるもので、「自然」のみが治癒をもたらす、医者がなすべきは、その自然に、働くチャンスを与えることだけだ、というヒポクラテスの医学観の妥当性である。そもそも Jones は、この自然観も含めて六つの傾向を、前記の三つの著作から導き出したのだが、厳密に言えば、それらは「仮説的な」hypothetical「学説」doctrine であって (p. xvi), 必ずしも三つの著作から導出されたのではなく、むしろそれらの著作の前提というべきものである。また実際この三つの著作に、治癒をもたらすのは自然のみである、という表現は見つけることができない。従って仮に、この自然観がこの三つの著作の背後に控えており、これらの著作はこの自然観に反するものを含んでいないとしても、それらは状況証拠であるに過ぎず、ヒポクラテスがこの自然観を抱いていたという積極的な証明にはならず、ましてやその自然観が妥当かどうかの検証はできない。あるいは、明示的な表現はなくとも、これらの著作の内容から、この自然観の存在を明らかにすることができれば、それはヒポクラテスがそのような自然観を抱いていたと言うことの間接的な証明と言える。

しかしそれは困難な作業となるであろう。というのも、ヒポクラテスの特徴の一つは、一般的に言われるところでは、経験的な観察に忠実となるに反比例して、思弁的な営みを拒否するところにあるからである。

Jones は総説という性格の故か、あるいはあまりに自明なことと受け取った故か、自然のみが治癒をもたらすというヒポクラテスの学説の根拠を尋ねることもなく、また現代医学もこの学説を「究極の真理」と見なしている、として、その当否を不問に付し、ただただヒポクラテスがこの学説を十分に遂行したのか、のみを問う。先の Houdart が、『流行病』の著者がなしたことは、「大便、尿、汗、等を吟味し、そこに消化 coction の印を探し、分利 crises を告げ、そして死を宣告する」だけだと非難するのに対して、『急性病の摂生法』から、当時の治療法を並べ立て——それは下剤や吐剤、湿布や入浴、さまざまな食事療法、瀉血、介護などよりなる——、当時としてそれ以上の何ができたというのか、と反論している。それはもっともであるが、自然のみが治癒するというヒポクラテスの原則を理解することからは、遠ざかることとなる。

2.2. 川喜田愛郎の『近代医学の史的基盤』から

川喜田愛郎 (1909-) の『近代医学の史的基盤』(上・下、岩波書店、1977) は全43章、1400頁近くにも及ぶ浩瀚な書であるが、その中でヒポクラテスに当てられているのは第3章の18頁であり、さほど詳しく取り扱われているのではない。それを承知で「自然治癒力」の理解に参考とすべき説明を紹介するならば、なによりもヒポクラテスの「自然」を体液説との関連で考察していることが注目を引く(川喜田、63頁)。ヒポクラテス全集の中でアリストテレスによってヒポクラテスの娘婿ポリュボスの作とされている『人間の自然性について』の第4節で、「ところで人間の体は、その中に血液と粘液と黄胆汁と黒胆汁がある。そしてこれらのものがその体の自然性 *physis* であり、これらによって病苦に悩んだり健康になったりするのである。一番健康であるのは、これらがお互いの混和 *kresis* (= *krasis* < *kerannymi* to mix) と性能と量の点で適切な状態にありもっともうまく混ざり合っている *memigmena* (< *m(e)ignymi* to mix) ときである。一方、病苦に悩むのは、これらのうちどれかが少なすぎるか多すぎるか、それとも体内で遊離して全体と混和して *kekremenon* (< *kerannymi*) いないときであ

る。…」(新訂ヒポクラテス全集第1巻, 960頁, 今井正浩訳)

ここで言われていることは、人間の自然 *physis* は四体液からなり、四体液の調和(それを混和と呼ぶ)が健康であり、その調和が崩れたときが病気である、ということであり、またそれだけである。それを川喜田は次のように補う。調和は人体(とくに心臓)の内在熱(訳によれば「体温」)による「調理」(*pepsis, coction*)の過程によって生じる(川喜田, 同, 64頁)。調和の崩壊、つまり病気は、気候の変化、不適正な食事、その他外界の激変などによる(同, 67頁。その典拠は、65頁によれば、『流行病第一巻』)。これらのことを踏まえた上で、川喜田は、「体液の『混和』を司り、また、異変に際してその平衡を回復させる生体の内在的しくみをヒポクラテスは人の『自然』と理解した」(同, 65頁)と表現し、その表現に付した註においても、「自然とは諸体液とそのはたらきの総体と解してよいだろう。…」と述べて、ノイブルガーの参照を促している⁷⁾。つまり自然は、諸体液であるとともに、その諸体液の調和を維持し、あるいは回復する機能でもある、ということになる。これが「自然治癒力」であり、「自然は病気の医者である」と言われる所以である。

かくて自然と医術、あるいは治癒と治療、の関係は次のようになる。病気が体液の変調であり、それは主として気候の変化や不適切な食事由来であるから、「従ってまずその原因を取り除くことこそ治病の要諦でなければならない。そうした原因が取り除かれたとき、人体はその自然に従って、かの体液の混和の乱れ(*dyskrasia*)を正しい混和(*eukrasia*)に引き戻して、病気はそこに回復に向かうだろう。医者の任務は人体に備わったその自然治癒のはたらき——後人言うところの *vis medicatrix naturae*——を助長すること、つまり養生法(*diata, diaitema, regimen*)でなければならない。」(同, 67頁)。さらに「養生法」が、「もともとは食事だけでなく、生活様式一般を意味していた」広い概念であることを注記し、再び本文で、養生法の中でもとくに「食餌療法」の重要性を強調する。こうしてヒポクラテス学派の治療は、全体として「保全的」(*conservative*)な傾向をもつこととなり、そのようなヒポクラテス学派、あるいはコス派が、時にはアスクレピアデスのような批判はあっても、基本的に後世にまで大きな名声を博したのは、「意識的にか、あるいは直覚的にか、節度を守ってその

中で最善を尽くそうとしたコス派が、そのむしろ単調な手続きにもかかわらず、そこにある深い生物学的、医学的洞察に支えられて、むしろ合目的にふるまい、自ずからより大きな実績に恵まれたためであった、とみることができるだろう。」(同, 69頁)これは慎重な表現であるが、単純に科学的であったがゆえに、後世に受け入れられた、というのではないことを示している。コス派は「予後」を重視し、当時対立したクニドス派は「診断」に力を注ぎ、病気の分類に熱心であった。どちらがより科学的であったかと言えば、むしろクニドス派であったかもしれない。にもかかわらず、コス派が名声を博することとなった。自然治癒力の重視は、科学的な態度と言うよりもむしろ生命に対する深い「洞察」に、結果的に対応していたのだ、と川喜田は言っている。

2.3. ノイブルガーの『自然治癒力史』から

川喜田前掲書は、彼の医学史の全般にわたってウィーンの医学史家 M. Neuburger : *Geschichte der Medizin*, 2. Bde., 1906に言及し、ヒポクラテスに関して、その第二巻の一節「ヒポクラテス医学概説」を「ヒポクラテス医学の本質を論じてこれ程的確な筆はまれである」と評している(川喜田前掲書, 註3.29。ただし筆者はまだ見る機会を得ていない)。ヒポクラテスの自然概念については、同じ著者(M. Neuburger)の *Die Lehre von der Heilkraft der Natur im Wandel der Zeiten*, 1926に繰り返して参照を促している(川喜田前掲書, 註3.25, 3.35, 3.46, 3.47など)。「自然治癒力」をタイトルに掲げた例としても貴重なので、ここでは以下後者を参照した。

ノイブルガーの前掲書序言によれば、19世紀後半、病理学的解剖学 *pathologische Anatomie* と物理学的診断学 *physikalische Diagnostik* の発達によって、局在論 *Lokalisationsgedanke* が支配的となり、科学的な厳密性が追求されるようになったが、それにともなって従来の伝統が弊履のごとく省みられなくなった。そのような行き過ぎた厳密化に対して、1890年代に病理学や治療学において根本的な反省が加えられるようになった。「血液や組織液、局所症の前提としての全身罹病、病気にかかりやすい体質や素質、器官の相互関係、心理的影響」(S. 2)などがあらためて注目を集めるようになった。このような新たな局面を導いているのが、「自然治癒力」*vis naturae medicatrix* という考え方である。この考え方はもとより古代から存在するが、今の時点

でこの考え方の歴史を辿るのは、単なる好事家的な趣味を満たすだけが目的ではない。「自然治癒と防御機構の説は、最近において、免疫や内分泌、炎症、再生、諸器官の相互関係や調節機構、などの研究によって、予想しなかったほど豊かとなり、治療上の驚くべき成果を示している。この説は一本の赤い糸のごとく、医学の歴史を貫いている。この説こそが、科学的な治療法を生み出し、発展させてきたものであり、その誤った理解と適用が、取り返しのつかない過ちを引き起こしてきたのである。ほとんどの医学者は直接間接にこの説に言及してきたし、またそうせねばならなかったのである。」(S. 3)

かくて本文においてノイブルガーは、ヒポクラテスから19世紀半ばの若きフィルヒョーに至るまで、まさしく「自然治癒力」を一本の赤い糸として、錯綜する医学の歴史を解きほぐしていくのである。あえて単純化すれば、自然治癒力を想定する主流の側に、ヒポクラテス、ガレノス、そのガレノスを批判する、「フェウスト」のモデルに擬されるパラケルスス、イギリスのヒポクラテスといわれたシデナム、世界で最初に臨床医学教育を導入したオランダ・ライデン学派のブルーハーフェ、生氣論と「フロギストン説」のシュタール、らを配す。他方で自然治癒力の存在を否定する反主流派に、原子論のアスクレピアデス、イギリスのジョン・ブラウン(川喜田、前掲書、377頁、によれば、英雄的なブラウン主義の流行は、フランス革命とナポレオン戦争を上回る死者をもたらしたと噂される)、瀉血を頻用しその治療法がVampirismus(吸血鬼)と揶揄されるブルセー、科学者として有名な機械論のボイル、顕微鏡的組織学を開発したヘンレ(R. コッホの師でもあった)、らを置く。その対立を主軸として、その対立をなぞるように、治療上の慎重派と積極派、食餌療法中心と薬物・手術中心、保全的対症療法と英雄医学(その一つがVampirismus)、生氣論と機械論、などのさまざまな対立が描かれる。

ノイブルガーによるヒポクラテスの「自然治癒」の説明は、川喜田前掲書において部分的に利用されているので、この小論においては、ノイブルガーの叙述から、ヒポクラテスの「自然治癒」を歴史上初めて批判した、プルザのアスクレピアデス Asklepiades von Prusa(前124頃-前40頃)を取り上げて、それ以降も間歇的に生起する「自然治癒」に対する批判の一つの例として、考察したい。そもそもヒポクラテス全集の、「病を癒すものは自然である」(前述)や「自然に反すれば、一切がむなし」⁸⁾と

いった、自然の合目的性に対する賛美や信頼は、後には、ヒポクラテス学派において、プラトン、アリストテレス、ストア派の目的論と一体となり、それに対してレウキッポスに由来する原子論や機械論が反対の立場をとるとというのが基本的な図式である(ノイブルガー前掲書、S. 11f.)。そして医学において自然の合目的性を最初に批判したのがアスクレピアデスであり、彼はヒポクラテスの治癒をもたらす自然を幻想 *phantasma* として退けたのであった。アスクレピアデスの基本的な立場は、エピクロスらの原子論的機械論的自然観であり、病気は原子の運動の乱れや原子と汗孔などの不調和から生じ、健康の回復は、医者 of 積極的な介入によって初めて可能となると考え、発熱が病毒に対する生体の合目的な反応であるといった目的論を退けた。「一切は必然から生じ、原因なきものはなく、自然は物体とその運動に他ならない」とか「自然は有益であるだけでなく有害でもある」という言葉が、5世紀の医学史家 Caelius Aurelianus のラテン語文献に残されている。またガレノスは、アスクレピアデスが、自然を「無駄骨折り」*mataiopoнос*、ヒポクラテスの治療を「死の看護婦」(前記註5参照)、と呼んだと伝えている(同、S. 12)。

アスクレピアデスは注意深い観察家として、自然治癒や突然熱が下がる事態の存在を見逃さなかったであろうが、それでも分利が「自然」によって生じた、とか、病気が体液の乱れによって生じ、それが「調理」されれば治る、といった体液説を理論として採用しなかった。にもかかわらず、1世紀のローマの医学史家 Celsus によれば、熱病に際して、発熱自体を専ら治療手段として用いたとか、痙攣に際して、発熱を引き起こすような手段を採用した、ということが伝えられている。これらは、その拠って立つ理論の相違は別にして、ヒポクラテスの治療法に類似したものである。

結びに代えて

ノイブルガーの『自然治癒力史』を通読すれば、ヒポクラテスとアスクレピアデスの対立に発する、治癒と治療、治療においては保全的治療と積極的治療、そして究極的には自然と人為、の対立、という基本的な主題が、紀元前5世紀から19世紀半ばまで、その時々 of 学問の道具立ての相違を反映して、少しずつ異なりながら、繰り返されてきたことが分かる。その間、自然治癒力は、一貫した主題であり続けてきた。他方で、ヒポクラテスにおいてはその根拠を

なしていたはずの、「体液説」は、いつの間にか歴史の帳の背後に退いてしまっていた⁹⁾。そしてノイブルガーによれば、19世紀半ばにおいて、その「自然治癒力」自体も、歴史の表舞台から退場することとなったのである。

19世紀の前半で筆をとどめているノイブルガーは当然言及していないが、自然治癒力にとどめを刺したのは、パストゥールやコッホの病原菌の発見に代表される、19世紀後半の細菌学の目を眩る発展であった。ある種の感染症の治療において決定的に大切なのは、その病原菌を同定し排除することであり、病原菌が排除されれば、病気は治ると考えられた。そこには自然治癒力の介在する余地はなかった。特定の病原菌が特定の病気を引き起こすという考え方は、従来までの、様々な因子が複雑に絡み合って病気がおこるという考え方に対して、特異的病因論 *specific etiology* と称することができる¹⁰⁾。あるいはまた、有害なものが外から加わって病気がおきるのと反対に、必要なものが不足して病気になるというもの、特異的病因論の一つの類型である。たとえばビタミンB₁の不足が脚気を引き起こし、ビタミンCの不足が壊血病をもたらす、というような、必須の栄養素の不足が病気の原因となる、という場合である。この場合でも、治療においてもっとも重要なのは、そのような不可欠の栄養素の発見と補給であって、一般的な自然治癒力の活性化ではない。さらにまた、体内のホルモンや酵素などが不足したり過剰になったりして発病する、という病因論も、特異的病因論の系譜に位置する。19世紀の最後の四半世紀に華々しく登場した細菌学は、当時の衛生学の大家フィルヒョウやペッテンコーファーらの、単なる病魔説の再来ではないかという警戒心を乗り越えて、その後百年間、特異的病因論として医学を支配しリードしてきた。特異的病因論によって、病気が様々な因子の絡み合いで生じるといういわば非特異的病因論は、近代科学の検証にたええない理論として退けられ——もっとも公衆衛生学では、「疫学の三角形」として、宿主 (host)、病原体 (agent)、環境 (environment) の相互関連を重視する——、それとともに、自然治癒力も閑却された。特異的病因論に、19世紀後半以降の外科手術の発達——それにはもとより消毒と麻酔の発達に負うところ大である——が加わる。一般に外科手術は患部を切除し、それによって治療する。患部の切除によって治療できるのは、病気が局在化している場合であるが、病気の局在視は、からだ全体の免疫力の活性化の重視と方向を逆

にし¹¹⁾、ややもすれば後者を看過することとなりかねない。

自然治癒力の概念に再び登場してもらわねばならないとノイブルガーが強調したのは、1926年のことであったが、20世紀も終わりを迎えつつある現在、その必要性はますます大きくなりつつあると、ワイルとともに言わねばならないだろう。この百年間の医学を支配しリードしてきた特異的病因論では対応できない事態に、私たちは直面している、いわく、エイズのようなある種の感染症、生活習慣病、悪性腫瘍、自己免疫病、そして抗生物質とそれに対する耐性をもつ細菌とのいたちごっこ。このように眺めれば、再登場を迎える舞台環境は、「自然治癒力」にとっても、極めて厳しいものであることは否めない。現代人が託つこのような病気は、単に自然治癒力を活性化するだけでは不十分なのではないのか、という疑いがきざす。なかでも自己免疫疾患という難病を前にすると、ひょっとすれば自然治癒力そのものが狂っているがゆえに発病したのではないのか、という絶望的な疑念が脳裏をよぎる。「自然治癒力」や「免疫力」に期待するところは大きいですが、同時にまたその限界も見据えなければならないであろう時代を、私たちは迎えているのかも知れない。

【註】

- 1) ワイルはここで、「人間が傷の手当をし、神がそれを癒す」という言葉を想起して、註に記している。一般には「医師が治療し、自然は健全ならしむ」*Medicus curat, natura sanat*という表現が人口に膾炙している。この場合さらに適切なのは、(ラテン語を解さないという意味で)「文旨の」理髪外科医から大外科医となった Ambroise Paré (1510-90): 「私は彼に包帯し、神が彼を癒した」であろうか。
- 2) 免取慎一郎先生(山梨大学)の筆者に対する個人的な教示によれば、ラテン語の *vis medicatrix naturae* には、*Corpus Hippocraticum* のギリシャ語では、*physis* 一語、まれに *physis therapeutike* が対応する。
- 3) *physies* はイオニア方言の複数主格で、アッティカ方言では *physeis*、単数主格は両方言ともに *physis* (金沢大学の安村典子先生の教示による)。ちなみに、当該引用文の末尾近くの「排尿、放屁、げっぷ、食べものの排泄、蒸発」は、Loeb 版、*Hippocrates*, Vo.7, ed. by W.D. Smith, 1994, p.254によれば、「尿の排出および二種類の風の排出、つまり食物に基づく風と息の排出、すなわち放屁とげっぷ」。
- 4) Jones はヒポクラテス全集の編集者として有名な Littré と同様に、ヒポクラテスと歴史家トゥキュディデスの文体の類似に驚いている (p. xv)。医師は患者の死にゆく様子を冷静に観察し、歴史家は国家の滅亡する様子を虚心に眺めたところに由来する類似である、と言えるのかも知れない。もっともヒポクラテス研究者によって指摘されるヒポ

- クラテスとトゥキディデスの類似は、このような一般的な印象に基づくのではなく、『流行病』の症例と『戦史』におけるアテナイの悪疫の叙述が、文体と内容において類似している、という具体的な指摘に基づく。『流行病 1』の訳者の大橋博司氏は「これらの症例集は、いわば臨床医のノート、病床日誌のようなもので、公表の意図を持って書かれた論文・口演形式をとらない。従って、文体、修辞法などへの考慮はいっさい省かれ、ただ必要事項だけが簡潔に力強く記述されている。ちなみに同時代の史家トゥキディデスには、ペロポネソス戦役中アテナイを襲った恐るべき悪疫についての正確無比の記載があることは有名であるが、文体、内容ともに本篇との類似性がしばしば指摘されている」と解説している（田村松平編、世界の名著、9、ギリシャの科学、1972、157頁）。
- 5) ノイブルガーは「死の観想」の代わりに、ガレノスの書物から、*thanatou melete* という表現を引用し、それを「死の看護婦」*Wärterin des Todes* と訳している（ノイブルガー、『自然治癒力史』、S.12参照）。ガレノスの表現は、プラトンの『パイドン』（81a）において、ふつう「死の練習」と訳されている *melete thanatou* と同じである。
- 6) HoudartやAsclepiadesの批判に組みするわけではないが、重篤の患者を前にして、できる限りのことをするというのは医師の使命であり、そこからして、場合によれば、できる以上のこともすべきだ、と医者が考えたとしても、あながち理解できないことではない。「自然治癒力」の評価と関連しつつも、薬剤や手術による治療の消極派と積極派——その極端が「英雄医学」である——の対立は現代にまで及び、医学史を貫徹する対立軸を構成している。
- 7) ノイブルガーは『自然治癒力史』（S.6）の本文において、「ヒポクラテスは病気における〈*Physis*〉のはたらきを極めて注意深く観察したが、・・・自然と治癒本能の本質を思弁的に考察することは、いさぎよしとはしなかった。それでも個別的な記述から、ヒポクラテスの場合、自然とは有機体全体のことであり、ということが出来る」に註を付し、『人間の自然』論において、自然とは四体液の結合であり、体液によって体の自然が形成され、体液によって体は病気となったり健康となったりする、しかしガレノス

もいうように、全集全体では多義的で、一致せず、さらに四性質（温・冷・乾・湿）、四体液（およびその共同作用）、時には内在熱、を意味する、と指摘している。そして上述の本文に続く本文で、「治ろうとする過程は、生の表れの一つであるに過ぎず、後世の人が言うような『自然治癒力』はヒポクラテスの知るところではない」と述べ、それに附註して曰く、「〈自然〉はヒポクラテスにおいて、時に合法則性であり、時に本質や実体であるが、力の概念は彼には縁遠いものである。」

- 8) ノイブルガー、S.9、『法』と明示してS.13、で引用。『新訂ヒポクラテス全集』の『法』（大槻マミ太郎訳）、2では「資質がふさわしくないならば、すべてが無駄になってしまう」と訳されている。
- 9) ヒポクラテス、ガレノス流の体液病理学 *Humoralpathologie* に決定的な打撃を与えたのは、病気の「座」（*sedes, seat*）を確定しようとした近代の固体病理学 *Solidarpathologie* であり、その「座」を18世紀イタリアの病理形態学のモルガーニは器官とし、フランスの組織病理学のビシャは組織とし、その流れの中で19世紀の細胞病理学のフィルヒョウは細胞とした（川喜田愛郎、病気とは何か、筑摩書房、1970、第4章 病気とかたち、参照）。
- 10) 特異的病因論については、ルネ・デュボス、健康という幻想、医学の生物学的変化、田多井吉之介訳、紀伊国屋書店、1964（第1刷）、1974（第9刷）、特に第4、5章、参照；特異的病因論の栄養不足などへの拡張的応用については、ルネ・デュボス、木原弘二訳、人間と適応——生物学と医療——、みすず書房、1970（第1刷）、1973（第3刷）、特に第XII章第2節、参照。
- 11) 川喜田、前掲書、1209頁：これまで治療ないし要望の多少とも確実に成功した病気はおよそ二通り。(1)外因性の一——たとえば微生物感染のようなプラスの、あるいはビタミン欠乏症のようなマイナスの——急性ないし亜急性の病気：外から来る *exogenous* 病因に適切な手段を講ずる。(2)外科的療法：病気が局所的のものである場合、言いかえればその病理学が全身の脈絡を一応離れても曲がりなりに考えられる場合に、形の修復、ないしは病巣の除去によって、正常に近い生理の回復をはかる。

On *Vis medicatrix naturae* and Hippocratic Idea of *Physis*

Hiroshi Hosomi

Summary

Since ancient times, people have believed that, if one suffers from a disease, he will surely be restored to health by his own constitutional power. The power, called *vis medicatrix naturae*, has been traditionally associated with Hippocrates in spite of the fact that he did never mention it anywhere clearly in his writings. According to A. Weil, however, contemporary specialists in medicine tend to ignore *vis medicatrix naturae* and often put emphasis on *materia medica* as the most effective means of remedy. But, as is well known, modern drugs may cause some serious troubles in medical treatments. Therefore, I propose that it would be significant to reconsider and reevaluate *vis medicatrix naturae*. I shall discuss what *vis medicatrix naturae* means with reference to Hippocrates's idea of *physis* and also to the commentaries of W.H.S. Jones on *Corpus Hippocraticum*, and to the historical studies on medicine by Y. Kawakita, and M. Neuburger.